

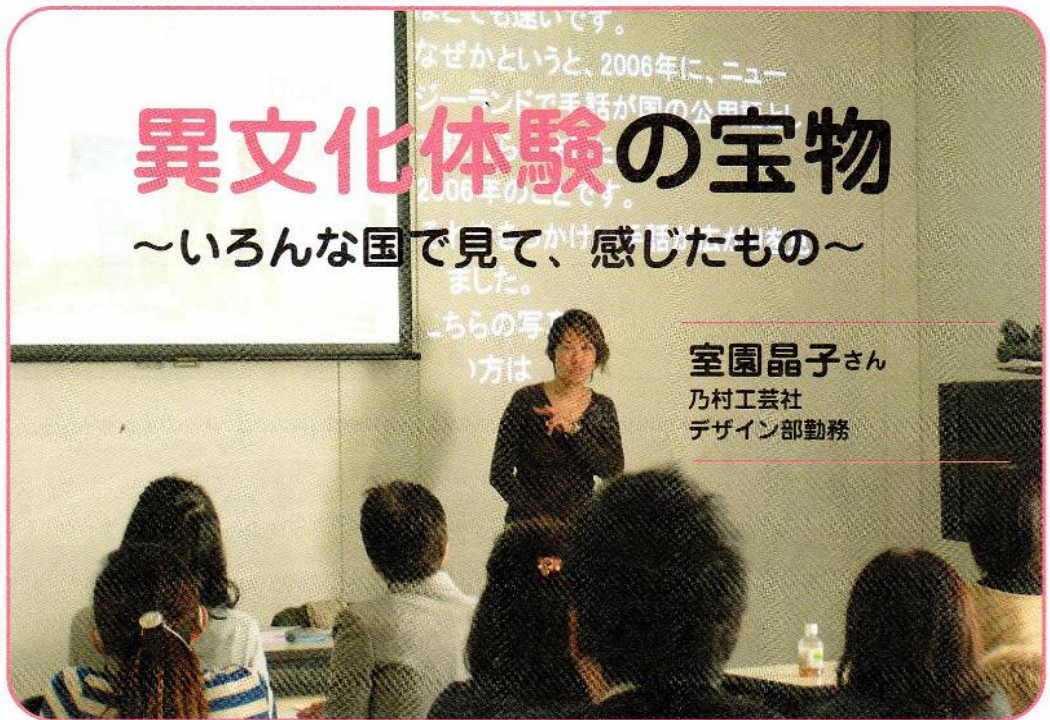
SSKP



NO. 239 2012年12月

— 聴覚障害児と共に歩む会 — トライアングル TRIANGLE





室園晶子さん
乃村工芸社
デザイン部勤務

異文化体験の宝物

~いろいろな国で見て、感じたもの~

20歳のとき世界ろう者会議に参加し世界観が大きく変わった

みなさん、おはようございます。いろいろな国に行き、いろいろな方と話をしました。そこで学んだ経験についてお話しします。

私は横浜生まれです。でも、育ったのは目黒区

です。生まれた時は、予定日より1ヶ月早く生まれました。そのため、生死をさまよう状態だったようです。両親に「いつ聞かえないことがわかったの？」と聞くと、母が言うには、掃除機をかけても、ぐっすり寝ていたの、おかしいと思いましたが、あちこちの病院で調べてもらい、聞かえないと分かったそうです。はっきりわかったのは1歳のときです。そして、トライアングルの前身、母と子の教室に通い始めました。

両親は障害があっても特別だとは思っていません。ろう学校もあるのは知っていましたが、元の学校へと普通小学校に通いました。目黒で一番小さな規模の小学校でした。

中学校は目黒で一番おきなマンモス校でした。中学校では、隣の小学校からも生徒が集まります。外務省職員の寮が近くあったので、帰国子女が多く、勉強ができる子が多かったのです。私は落ちこぼれ気味で、勉強が嫌いになってしまいました。もちろん、一番困ったのは英語です。全く分かりません。最初から躓いてしまいました。

高校は都立高校です。初めてのテストで、現代社会は学年トップになりました。先生に言われて、信じられないと思いました。私が一番？ クラスで一番かと思ったら、学年で一番だと言われて、ほんとうに信じられませんでした。でも英語はビリのほうでした。高校生活は正直、つまらなかったです。

外の世界に興味を持ち始めたのが高校時代です。年頃なので、おしゃれに目覚める時期です。他の友達と競って、おしゃれがしたい頃。流行の

物がほしいという気持ちが芽生えます。親からのお小遣いでは足りません。なので、アルバイトを始めました。

アルバイトは探しても難しかったです。ほとんどが18歳以上。16歳では難しいんです。しかも耳が聞かえないので、話をしなくてもできる仕事を探しましたがなかなかありませんでした。両親に電話してもらって応募して、面接に行きますと「耳が聞かえないの。ではいらぬよ」と、門前払いもたびたびでした。それでも、弁当づくり、チラシ配布、クリーニングなどや、クリスマスケーキ作りなどのアルバイトなど、いろいろなことを経験しました。初めて働くことの大変さ、社会とは何かを経験し、コミュニケーションの大変さ、そしてお金を稼ぐのは大変だということを経験しました。

高2の時、友達に誘われて、サーフィンを始めました。デフチームに入りました。私以外のメンバーは手話で話していました。その時、ショックを受けました。コミュニケーションができないのでショックでした。でもみんな優しいので、一緒にやろうよ、手話を覚えればいよいよと、楽しくそこで活動し、今もサーフィンを時々やっています。

高3の時に将来の進路を、決めなければならなませんでした。でもかなり迷いました。どうしてかという、勉強は嫌いで、体育と美術が好きでした。どちらが私に向いているのか、得意な方に行けばいいのか？ 先生方は聞こえるのでコミュニ

おたより



世界ろう会議で



室園さんの仕事（写真中・下）

ケーションの問題もあるだろう、仕事にできるのか、いろんな心配がありました。体育大学もいいと思いましたが、年をとったら限界があるということ。それで将来、体育関係は無理だろうと、美術の道を選びました。美術大学に入るには、学力が足りないと言われ、滑り止めに専門学校を受けたいのではと、アサビを受けました。阿佐ヶ谷美術専門学校です。

20歳の時に、世界ろう者会議が東京で開かれました。初めて参加して、世界観が変わったというか、意識が大きく変わりました。世界ろう者会議で会う、外国の聞こえない方たちが、とても誇りをもって、活動しているところを見ました。聞こえないのは恥ずかしいとか、引つ込み思案ということはない。今までの考え方、ある意味、自分の偏見の意識付けが変わるような場所でした。外国ってどんなところなんだろう、世界は広いなど、興味を持つようになりました。是非外国に行きたい。そのためにはお金が必要と、休みを使って、全部アルバイトをして、お金を貯めました。学

校の勉強の一環として、フランスとイギリスに2週間行きました。その後、フィンランドに行きました。初めて触れた海外のろう社会がこの国でした。大変おもしろかったです。たくさんの人に会い、コミュニケーションをとりました。その頃はバブル崩壊の時代。ちょうど景気が悪くなる時期です。バブル崩壊で私のデザイン事務所も仕事が見つからなくなりました。1年間ほど、仕事がない、無職の生活が続きました。その間アルバイトをして、いろんなところに行けたのはよかったです。幸い1年後に仕事が見つかり、乃村工藝社に入社できました。正社員採用だったので、大変ほっとしました。実際仕事をやっていくと、認めてもらうまでには、長い道のりがありました。会社も聞こえない人間を雇うのが3人目と経験が浅く、仕事の経験もさほど積んでいない私に対してどこまで援助すればいいのかわからず、仕事を任せられなかったのだと思います。同期の社員が出世するのには、自分は相変わらずのアシスタント的な仕

事だけ。こういったことに対してかなりのいらだち、シヨックがありました。9年前ですが、デザイン部になりました。そこである聞こえる女性に出会いました。その人は仕事のできる女性で、バリバリと一流の仕事をする人です。彼女の指導を受けて、聞こえる社会というか、一般社会のルールなどいろいろ学ぶことができました。その友達のおかげで私も仕事ができるようになりました。左の写真は、私の初めての仕事です。今まで自分の企画が認められてやった初めての仕事での写真です。こういった照明の造形や天井のグラフィックやオブジェなどを作りました。

障害者だから無理とは 言われない欧米の社会

次は、健聴者とする者の世界です。先ほどお話ししたように、サーフィンを始め、手話を覚えて、とてもコミュニケーションが広がりました。世界が広がり毎日が楽しくなりました。小さいときか

ら聞こえる世界で育ちました。親も健聴だし、周りの友だちも聞こえる。会話をしていた感じでした。しかし、今思えば、一方通行のような感じですね。言われるまま、自分が言うだけで、言葉のキヤッチボールはなかったように思います。健聴のみなさんが笑ったり、盛り上がっている時に、「何？」と聞くと、説明はしてもらえなければ、みんなが笑い終わったあとにそれを聞いても、良さやおもしろさがかめないとあります。

しかし、手話を覚えてからは、冗談や笑い話や、突っ込みなど、コミュニケーションのやり方を初めて理解できました。コミュニケーションを深めるための手話がある、ということがわかりました。聞こえないろう者の場合は、特別な文化、健聴の世界とは違う文化があると思います。それは変えられません。欧米では、デフスタディという、ろう専門の研究分野の学問があります。1960年頃から、手話も言語であり、文法的なものもルールとしてきっちり研究されてきました。ろう者の大学の中でも手話の専門の言語研究という専門分野もあります。

日本は残念ながらまだまだそういうことはされていません。福祉なので、障害者は支援しなければならぬという見方がまだまだ続いています。

日本の社会では、障害者は完璧ではない、欠落したもの、という見方があります。上から日線というか、そういう感じ、見方をする人がまだまだ多いと思います。行政にしても、福祉に気持ち・援助・ボランティアという捉え方です。例えば、手話通訳。社会全体の捉え方がボランティア意識の一つと強く、収入が少ないのが現状です。通訳としてプロとして自立するのは大変です。

欧米は手話通訳も外国語の通訳並みにきちんとプロとして認められています。給料も高いです。手話通訳もプロとして生活できる状況にあります。が、日本は違いますね。

外国の障害者は、本当の意味で、精神的にも、他の人に頼らない、自分でできる、ということまで自立しています。ろう者であることにプライド、自信を持っている。

それから、気づいたのは、外国社会はシステムも進んでいるので、みんなも自立できる。でも日本はまだです。壁があり、どうしても人に頼らなければならぬ状況が起こっています。ですから、なかなか本当の意味での自立が難しいことになります。まずは社会全体の環境を整えていく。それが、障害者の自立を手助けする一番の早道だと思います。

障害者だから無理だと言われることが多かったです。かわいそうね、残念ね、と言われながら育ちました。自分も障害者で、マイナスの存在として見ていました。また、両親もあなたの子ども聞こえないの、かわいそうねと、いわれて苦しく、



悔しい気持ちがあったと思います。マイナスのイメージがあったと思います。自分は障害を持って生まれた。だから、大変。でも、そのお陰で、いろいろな手助けを受けて、優しい人や気持ちに合せて感動や喜びもたくさんもらいました。私もいじめられたり、悔しい気持ちも経験しましたが、精神的に強くなることができたと思います。もし自分が聞こえていたらもっとワガママになっていたかもしれません。

世界のいろんな情報が 集まるフィンランド

次は海外での生活についてお話します。フィンランドです。ヨーロッパで日本に一番近い国です。直行便で、9時間半、思いの外近いです。フィンランド人は意外と日本人に近い感じ方というか、考え方を持っています。友達になりやすいところでした。お互いに助け合う精神とか、アジアの文化に近いところがあり、ヨーロッパ人でもここまで近いと思ったのはフィンランドくらいです。



世界ろう連名



フィンランド国营放送の様子



ニュージーランド手話ウィークイベントポスター

世界ろう連盟の本部が、ヘルシンキにあります。フィンランドのろう者は、世界ろう連盟の本部があるので情報が自然にいろいろと入ってくるそうです。世界のいろいろな情報がつかめて凄いなと思います。世界ろう連盟の本部と、ろう協と、世界レベルの会議ができる立派なカンファレンスホールもあります。教室、ホテル、プール、体育館、ろうテレビ局などいろんなものがここにあります。日本にもあればいいなと思います。

フィンランドのろう者の数は意外に少なく、5千から7千人ぐらいです（日本は手帳を持っているのが聴覚障害者36万人、実際は37万人）。昔、フィンランドのろう連盟は、ろうの会員のため、郵送で手話のビデオレターを送っていたようです。後にDVDが主流になり今はインターネットになっています。

健聴の大学の中に、ろう教育専門のクラスがあります。ユバスキュラ大学というところ。ヘルシンキにあります。フィンランド人の友だちも、20年前、その大学で勉強して、今はろう学校の教員をしています。ろう教育に興味を持つ人も増えて、この大学に行っているようです。フィンランドは、一般の人と話しているも、各国の歴史や文化も知っていて、教養が高いところ。すこ

いと思います。

YLEは日本のNHKと同じ、国营放送局です。YLEでは、ろう者が働き、手話ニュースを担当して、3人のろう者が正規職員です。左の真ん中の写真を見て下さい。立っているのがろう者で、話しています。後ろ向きの方は、夜7時からニュースにでている女性、聞こえる人です。この方がろう者の手話を読み取って声に出しています。どうしてそんなことができるのかを聞いたら、後ろ向きの読み取りをしている方は両親がろうのコーダの方なので、読み取りがよくできる、ということでした。

手話が公用語に認められた ニュージーランド

次は、南半球、オーストラリアの近くの小さな縦長の島、ニュージーランドについてです。今から10年前、社会の流れから考えて、将来は英語が必要だ、今からきちんと勉強したいと思って、日本の英語学校に行こうと思いましたが、それが十分ではない、海外にいった方が、覚えが早いと思って、留学を決めました。ワーキングホリデーという制度を使えば、1年間外国に滞在できる

ので、ニュージーランドに行きました。

年齢的なタイムリミットがありました。ギリで行くことができました。ニュージーランドもフィンランドも土地は同じくらいの広さです。ろう者は全国で5千人ほどでした。

その頃から、ニュージーランドでも、ろうの青年部の活動が始まっていました。世界ろう青年キャンプとか、世界ろう者会議とか、アジア太平洋地域での会議、キャンプなどに、ニュージーランドからもたくさんの方が参加しました。その頃から参加率が上がり始めました。

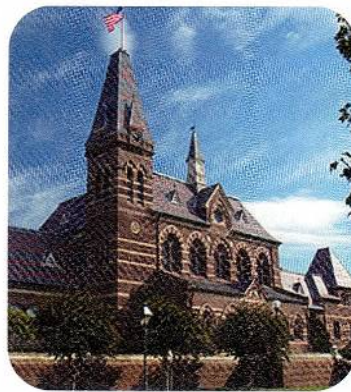
私が通っていた大学は、手話通訳を好きなきに依頼して、通訳が派遣されるという環境でした。いつも決まった2人が来て、交代で通訳をしてくれました。ろう学生もたくさん受け入れて勉強をしています。私は、外国人として初めてそこに通った学生です。

その後、聞いたところでは、問題が1つあったらしいです。私が外国人ということで、本来なら手話通訳の派遣ができなかったようなんです。ニュージーランド人だけだったそうです。大学側のコーディネーターが私に通訳を派遣していたことは間違いだったと、後から聞きました。

そのシステムのおかげで、情報保障があったの



インターンシップの様子



ギャローテッド大学



で、私は大変楽しく学習できました。それがなければ、授業を理解できなかったでしょう。大変感謝しています。

大学はオークランド市にあります。経済のトップの街です。

ニュージーランドにろう者協会が出来たのは、1975年。日本の歴史の半分ぐらいですが、進み方、成長はとも速いです。

その理由は、2006年に、ニュージーランドで手話が国の公用語として認められたこと。それをきっかけに手話が急速な広がりを見せました。

次ページの上の写真の方は政府関係の手話通訳をされています。日本ではかなり離れたところに通訳がつくので、写真やTV画面に収まることにはないですね。見えなくらい陰に隠れた感じ、どこに通訳がいるのかとガツカリします。

日本もこのように変わって欲しいと思います。

障害者に対する格差や差別を感じないアメリカ

次はアメリカ編です。デザインの仕事にはいろいろ壁がありました。分からないことも多く、健聴者と同じように仕事ができないという悩みなどがありました。1つ越えると、次のかべにぶつか

り、よく失敗して、なかなかできないことがあります。自分なりの方法を見つけない、アメリカに行こうという気持ち芽生えました。しかし、お金の問題がありました。どうしたら良いかと考えていると、先輩や友人が、ダスキンが障害者に資金を出してくれると教えてくれました。試験に合格すれば留学資金を出してくれて、1年間海外にいくる制度があると聞いたのです。試しに挑戦してみたら合格して、アメリカに行くことができました。

世界でも1つだけ、ギャローテッド大学という、聴覚障害者の総合大学がアメリカ首都ワシントンDCにあります。ギャローテッド大学で、いろいろな人に会い、いろいろな勉強しました。聴覚障害者の中に重複障害者がけっこういました。私は健聴の学校で育ったので、ろう重複障害について初めて知りました。目も見えず、耳も聞こえない盲ろう者もいます。視野狭窄、弱視の方、アッサチャー症候群、ワーゲン病、ダウン症の方もいます。他にも、学習障害、注意欠陥多動性障害、知的障害、内部障害や車いす使用者など、いろいろな重複障害を持つ方がいました。大学内の3〜4割の方がそうです。

アメリカで有名なユニバーサルデザインの会社でインターンシップの経験をしました。インターンシップは1ヶ月の短い期間でしたが、その中でいろいろ学びましたが、短期間のため学びきれないことが残念でした。同僚のクリスは脳性麻痺の障害があります。でも彼もバリバリですね。仕事を任せられることが皆もよく分かっています、のびのびと仕事をしていました。日本の障害者環境とはこちらは全然違うな、ずいぶん進んでいると感じました。

ADA法ご存じですか？ アメリカの有名な障害者関連の法律です。ADA法は、障害者が自立プラス平等に生活ができるための法律です。この法律のおかげで、ニュージーランドと同様に、オバマ大統領が話すすぐ横で手話通訳士がいる。これが当たり前の形です。ADA法のおかげで、障害者差別を受けることなく、対等に生活できる保障がある、ということなんです。

聞こえる人と同じに、平等に生活できるプラス



ニュージーランドの手話通訳者



私は何でもできる！



の面がありますが、マイナス面もあります。何でも自分でアピールしなくてははいけません。アピールしないと、法律の恩恵が受けられません。実力主義の社会なので、障害があるためにできないために、うまくいかずに、競争から落ちることもあります。職場で通訳を呼ぶ時は、会社がお金を払わなければいけません。払えなければ違反となり、罰金を払うことになります。アメリカは簡単に裁判を起こす社会です。会社も何かあれば、訴えられると、びくびくしてしまうので、障害者の雇用を躊躇するところがあります。本当の平等社会を作るのは、難しい面があるとつくづく感じます。

しかし、街を歩くと、障害者も、平然と普通に歩いています。じろじろ見られることもない。普通に生活ができると感じました。格差や差別を感じないので、気持ちも楽でした。

精神的な医学も進んでいます。ロチェスター工科大学のメディカルセンターの中にあるDWC (Deaf Wellness Center) はろう専門の精神ケアができる場所です。1991年、障害者がカウンセリングを受けるには通訳が必要だが、それではカウンセリングには行けないと不満が広がり、障害者の精神医学もきちんと保障していこうという動きが始まりました。そして国に働きかけて、DWCができました。今ではたくさんの方がカウンセリングを受けに行っています。日本にも早くそういうものが立ちあがって欲しいと思います。情報保障の関係で、こういうこともきちんと保障がされています。

アメリカにはいろんな人がいると、知りました。障害にもいろいろあるのだと知りました。ダイバーシティの世界、障害者だけでなく、人種問題等もあります。大学の友達でも、ほんとに人種もまちまちです。

**聞こえなくても
できないことはない**

ユニバーサルデザインについて知っていますか？ デフスペースというものがいろいろあります。ご存じないと思うので、紹介します。デフスペースは、ろう者が自然なコミュニケーションが取れることを基本にしています。隣同士で話す際には、手話が見にくいですよ。座る位置を考えると、健常者にはない空間の取り方、快適な距離感を考えています。

インターシップの職場研修でお世話になったUUDで任されたのは、ろう学校のデザインでした。全米世界一小さい州、ロードアイランド州立聾学校でした。ろうに優しい環境を考えて作ったデザインです。人が通ることが見えるように、低い設計になっています。人の通りがわかる、視覚的に優しいデザインです。

1つ覚えておいて欲しいことがあります。障害者でもできないことはない、無理なことではない、何でもできるということです。実際、アメリカに行ったとき、インターシップの場所で、びくびくしたことがあります。自分の席の近くにこのような言葉が書いてありました。

「Yes We can」。他にも、アメリカの友だちのテーブルデスク前の壁に、このようなポスターがありました。「We Can Do It」(私は、何でもできる)「すくく良い言葉だと思いました」

みなさんも是非自分で、できないことはない頭に置いて頑張ってください。

「We Can Do It」(私は、何でもできる)「すくく良い言葉だと思いました」

みなさんも是非自分で、できないことはない頭に置いて頑張ってください。

聴覚障害児の日本語言語発達のために

ALADJINを聴覚障害児教育の領域から読み解く

厚生省の感覚器戦略研究の研究成果として発表された「聴覚障害児の日本語発達のために」ALADJINのすすめ」のチームリーダーを務められた岡山大学医学部の福島邦博先生を講演を中心に、聴覚障害児教育の専門家や当事者を招き、シンポジウムを開催しました。そのときのお話の一部を抜粋します。

主催者挨拶

■福島 智 先生

東京大学先端科学技術研究センター

みなさん福島智でございます。東京大学先端研

でバリアフリー分野を担当しております。

自身は、9歳のとき目が見えなくなり、18歳で耳が聞こえなくなった盲ろう者です。聴覚障害者の当事者とは言いがらゐりますが、しかし聴覚障害でもありますし、視覚障害者でもあります。

本日は、「感覚器障害の戦略研究」と少し分かっていくのですが、とにかく聴覚障害をめぐっての大規模な調査研究がなされた。そのプロジェクトのチームリーダーをなさった福島邦博先生に基調講演をいただいています。

こういうシンポジウムは、わりと予定調和的、つまり最後どうなるか決まっているものが多いものです。しかし、それではおもしろくないし、最初から意見がすべて一致していたら、そもそもシンポジウムをやる意味がないと思います。

私は、多様性「ダイバーシティ」が大事だと思っています。時には摩擦が生じることもある。意見が対立したり、異なる立場での議論がでることもあると思います。そうした摩擦の中で、熱が生まれる。エネルギーが生まれると思っています。

是非今日は、お互いの立場は尊重しながらも、ここに出てくるみなさんもフロアの皆さんもガチンコの、本音の勝負をやっていただけ嬉しかなと思っています。よろしくお願いします。



ALADJINとは

平成19年より、厚生省の感覚器障害児の医療と教育を考える戦略研究が開始され、平成24年1月に研究成果報告として「聴覚障害児の日本語言語発達のために」ALADJINのすすめ」が、テクノエイド協会から刊行されています。

その報告書の中で、ALADJIN（アラジン）とは、戦略研究が提唱する日本語言語発達検査のパッケージ（各種の言語発達検査を組み合わせたもの）であるとされています。平成21年から1年間で、600名以上の聴覚障害幼児小学生が、検査を受けました。

戦略研究では、日本語を構成する重要な要素（ドメイン）として、「音韻の認識」や「認知機能」が下位に存在し、その上に「語彙」、「統語」、「談話」、「語用」の各要素が存在するとしています。それらの要素（ドメイン）ごとに、日本語言語力を評価する検査が組まれています。

福島智先生



司会を務められた大沼直紀先生

ALADJINからわかったこと

■福島 邦博 先生
岡山大学医学部 耳鼻咽喉科

私の仕事は耳鼻科の医師です。岡山には「かなりや学園」という難聴幼児通園施設があります。ここで長い間、嘱託を兼任していました。難聴のお子さんとの付き合いも、15年以上になります。

私は耳鼻科医ですが同時に、難聴の原因になる遺伝子についての遺伝医学にも深く関わっておりました。アメリカでは、遺伝子の研究がとてつもなく膨大な研究費の5%は倫理の問題に必ず費やさなければならぬというルールができています。そのために、遺伝医学に関連した倫理原則がとてつかり作られております。一番大切にしています問題は個人のオートノミーに対する尊重です。オートノミーは、個人の自己決定権を尊重する、何がなんでも尊重する考え方です。医療技術について正確な情報を提供し、本人が最善の選択ができるようにしようという、これがオートノミーの基本的な考え方です。

私自身は遺伝医学だけでなく人工内耳に対して



福島邦博先生



図1

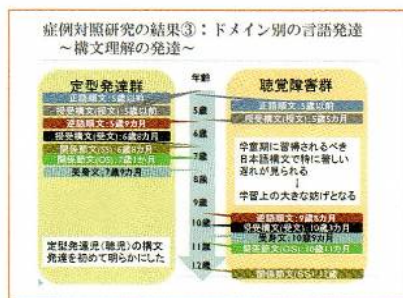


図2

も同じ考えで進めています。医療者として私たちができることは、その能力について、きちんと証拠に基づいて説明をすることです。こういうふうになれば、こんな風な展開になるということをちゃんと説明していく。その上で選択してもらうのが、一番大切なのではないかと思っています。

言語についてが、今回の大きなテーマです。言語は何のために使うか。1つは人とのコミュニケーションをとるために使うのが原則です。友達を作るなど、本人が広いネットワークを作るために必要とされる言葉の力。もう1つは学習のための言語力。戦略研究のターゲットの言語の使い道は、コミュニケーションと学習です。

その評価をするためには、どうやって切り分けるか。報告書に何度も出てきますが、ドメインごとにわけることです。イメージしやすい言語の評価法は、英語のテストですね。英語のテストがあると、1番最初は、発音。次くらいには、単語テスト。そして文法テストがきます。次に長文読解。長文読解にも2つの言い回しがあり、長文を理解するほうをリテラシー、長い文章をいくつかつなげて、言いたいことを相手にぶつけることを談話といえます。談話とリテラシーの2つがあります。

英語のテストで、1問ずつに違う側面をみるのと同じように、日本語の力を側面毎に見ましよう、これがドメイン別評価の基本的な考え方です。

ALADJINは日本語だけを対象としていますが、現実としては難しかったからです。私の知っている限り標準化された日本語手話評価法というのが、今の日本語にはありませんでした。

では結果について説明します。まず、日本の現状です。聴覚障害児の60〜70%のお子さんは、日本語の理解力が十分でないままに日本語による授業を受けている可能性があります。これが今回の結果で、このまま小学校卒業に至る場合が多い。これで本当によいのかを問い直したいと思います。

聞こえる子どもたちの場合は、8〜9歳で8割方が日本語の文法理解ができるようになります。聞こえない子供の場合、補聴器の子に比べて、人工内耳の方が早く構文を獲得しています。つまりシンプルな文章なら文法的な問題もあまり問題がありません。しかし遅れて獲得される構文、受け身や関係代名詞などちょっと難しい文法の場合、補聴器でも人工内耳でも同じように、ゆっくりになつていくことがわかります(図1)。

聞こえる子どもたちの場合は、だいたい6〜8歳の多くの子どもたちが複雑な文章ができるようになります。聞こえない子どもたちの場合は、それが10〜11歳となり、遅れているという結果が出ています(図2)。この状況の中で、本当に日本語による授業をそのまま受けさせていいものかという問いかけになります。問題が生じている理由

図3

戦略研究からの提言

- ▶ 統語は
 - ・ 8才の段階で一度統語の検査を行う
 - ・ この段階で遅れがあるなら、介入指導を行う
- ▶ 語彙は
 - ・ 定期的なチェックが必要。可能なら毎年
 - ・ 質的なチェックも必要
 - ・ 「和語(やまとことば)」と「漢語(からことば)」
 - ・ 動詞などの意味的役割について
- ▶ 談話は
 - ・ 小学校3年生ではチェックが必要

です。

日本語の理解力が判断できないために、見過ごされてしまっている可能性はないでしょうか。サポートが必要だとはいえ、見えていないようになれば、適切なサポートができるのではないのでしょうか。

聴覚障害児を言語発達のスコアで分けると、すごく良い子、すごく悪い子、真ん中のグループ、と3つにわかれます。真ん中のグループとして気になるのが、

真ん中のお子さん。おしゃべりが真ん中くらいできるお子さんが、その他のテストの結果がどうか見えます。理解に関しては、中間群と下位群の間に、ほとんど差がないことがわかります。つまり、中間群はそれなりにしゃべることができるが、きちんと理解していないお子さんがこの中に含まれると考えます。日本語を理解しているかどうかは、その後の学力に影響を与え、こういう真ん中のグループが9歳の壁を越えられず、学力的にとっても厳しい思いをすることが読めてくると思います。

で、どうすべきか。もしもこれが見過ごされている子どもたちなら、言語領域別の分析をします。少なくともその子どもがどんな困り具合につながるのか推測する手立てになります。手助けが必要なのはありますが見えにくい。特に中間群でばっと見、友達や家でも何となくうまくやっている、でも本当は理解していない子がいる。それは見ええないのです。

そんな子どもを適切に検出するためには、ALADJINの評価が必要で

文法の問題は、8歳の段階では一度検査が必要

です。日本語で授業を続けるなら、この時点で本当に一通り身についているか、チェックする必要がありますし、もしこの段階で遅れが明白ならぜひひてこ入れすべきだと思います。語彙は、年齢が上がるとにつれ、どんどん増え、小学校の間は少なくとも増え続けます。定期的なチェックが必要で、できれば毎年やって、本当に大丈夫かチェックすべきだと思います。和語と漢語、やまとことばとかからことばですが、漢語になるほど抽象的で難しくなるので、具象的な言葉がわかるからと言って安心してしまわないこと。これも、ろう・難聴研究会からずっと思っていることです。

助詞についても語彙の一部として検討すべきと思います。談話能力についても小3くらいにはチェックが必要です。小2〜3の間で、日本語がどれぐらい身についているか一度チェックする必要があります。この点での提言です(図3)。

戦略研究の中では、症例対照研究に加えて介入研究も行っています。これは指導プログラム手順書があります。マニュアルをつくり、それにそった言語指導を行ったら、それで日本語が順調に伸びたかを検討しているものです。その流れです。言葉の発達に遅れがありそうであれば、まず最初にALADJINの日本語の評価、アセスメントを行い、語彙、統語、談話、語用の4つに分けてチェックします。そして指導プログラム手順書を作り、語彙のこ入れをやり、最終的な設問を行い、どれだけこ入れが伸びたか調べます。6ヵ月間に12回やります。

事前、事後で比較しました。6ヶ月間の指導をしたとき、始める前、後とシンプルに比較すると、

片っ端から値として優位に言語発達が伸びていることが分かります。大雑把に見て、基本的サポートがあるだけのときと比較し、4倍くらい効率的にスコアが伸び得ていることが示されていると思います。指導を受けた子供たちは、半年でめざましい進歩を示し、親御さん、先生が見てもずいぶん違うという結果でした。どういう指導法をするのが良いかを比較していくためにも先ず評価方法を確立することが、今の日本で必要とされる要件ではないかと思えます。

私たちとしては、ALADJINという名前をつけた、日本語をそれぞれのドメイン毎に評価する方法を先ず皆さんに届けることが、最初のステップとして大切だと思っています。どう使っていけばいいかの冊子を作っています。本は無料で、入手ができます。テクノイド協会までご連絡ください。入手できます。読んでいただき、是非広い範囲で利用していただければと思います。

聴覚障害教育の領域から読み解く

■武居 渡 先生

金澤大学 / 手話学の立場から

私は手話を研究する立場でお話したいと思えます。調査に参加した生徒の3分の1くらいが手話を主に使っています(手話や指文字が友達とのコミュニケーション)。残りの3分2が音声を使っていることがわかりました。どの学年も1対2の割合でした。手話使用児と、音声をメインで使用する子を比較すると、音声メインの子の方が成績が高い結果が出ています。一方、小学校5〜6



武居渡先生

年くらいで、この比較の値が小さくなっていくともわかりました。この検査で求められるコミュニケーション力は、小5になれば、音声、手話使用児どちらも達成されることとなります（図4）。

全体をとおしても音声メインの子と手話メインの子では、音声メインの子の方がスコアが高い。だからといって音声での指導効果が高いわけではないことに留意する必要があると思います。音声のみでコミュニケーションがなかなかとれず結果的に学年があがってから、手話を使っている子はいませんが、手話から音声メインにした子はほとんどいません。手話使用児は、手話習得後、その力を使い日本語の読み書きをどれだけ伸ばしていくかの指導を考えていくわけです。最終的にはキャッチアップするとしても、手話をつかうと、少し遅れることになるので、その意味でも予想を超えることではなかったと言えます。

日本語力は、聞こえない子どものQOLを高めることに貢献します。これは間違いない。

でも日本語力だけで幸せに生きられるわけではありません。かつての口話法で高い日本語力を与えた人たちが、社会、大学にでてアイデンティティ

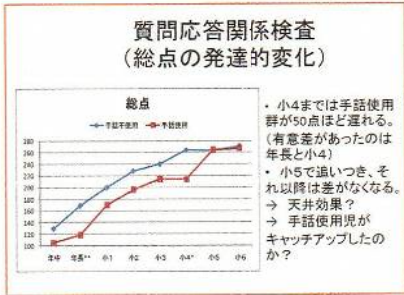


図4



中井弘征先生

の危機を経験し、手話にであい、学び直し、ろう者であることを、再発見して、ろう者のアイデンティティを確立し、社会で活躍する人たちがたくさんいたと思います。その意味で聞こえないことを、どう考えるか、これは言語力だけでははかれない、その先にあるものと考えます。その意味で戦略研究の結果をふまえて、障害認識、アイデンティティも合わせて考えないと、すべてを犠牲にして言語力をあげることに力をついやしてしまうことになりかねないと思います。

■中井弘征先生

奈良県立ろう学校／聾教育の立場から

聾教育の現状からはじめに話します。1つめ、子どもの実態やニーズが多様化してきています。手話の必要な子どもがいます。聴覚主体の子どももいます。軽度・中等度難聴や人工内耳など、聴覚主体の子どもたちがいます。重複障害や発達障害など、特別な配慮や支援が必要な子どもも増えてきています。

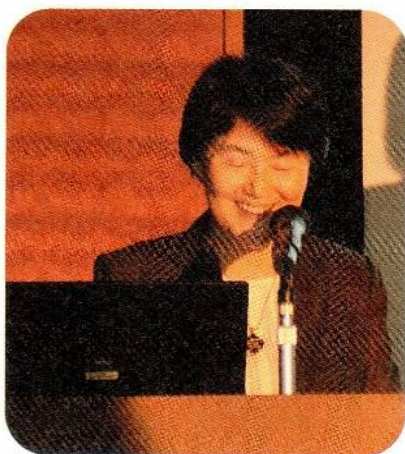
2つめです。手話の活用がすすむと同時に、手話で育った子どもたちの日本語の力への関心が高

まり、日本語の力をどうつけて、どう育てていくかが大きな課題になっていきます。

3つめは、人工内耳の普及です。聾学校にも随分と人工内耳のお子さんが増えてきています。性能が向上し、手術は低年齢化しています。愛媛大学の2010年の高橋信雄先生の調査では、聾学校全体の約15%、幼稚部では約30%が人工内耳の子どもたちです。幼稚部の子どもがあがってけば、比率は増えていくだろうと思います。

報告書を読んで着目した点があります。語音明瞭度・発音明瞭度と日本語発達との関係についての報告です。これらの相関が高いという結果でした。この結果をうけて、これは私なりの解釈ですが、手話が主たる子どもにとっても、日本語を身につけていくためには「聴覚活用や発音・発語の活動は重要である」ということです。手話があるからいらぬということではありません。ただし、全ての子どもに「明瞭さ」を求めるのではなく、日本語の音韻を意識し日本語を身につけていくために重要な活動だと考えているのです。聴覚・音声回路が使える・使えない、手話を使う・使わないに関わらず、日本語の音韻やしぐみ(文法)を意識し、理解し覚え使用していく必要があります。そのためには、口声模倣や発音・発語、音読などによる活動を新しい視点で見直すべきだと考えています。耳と声で、目と身体でフィードバックし日本語を使う、大事なことでないでしょうか。

着目点? 「構文別の獲得年齢と順序について」の報告です。小学校低学年から中学年の間に構文の獲得につまずき、十分な構文の力を持たないまま学習を受けている児童が多いという示唆です。これについては、教科学習を進めながら、一方で



齋藤佐和先生

継続的な構文指導の取り組みが必要です。担任だけではなく、学部全体での継続的な取り組みが必要だと思えます。

その他では、読み書き障害のスクリーニング陽性率が30%という報告がありました。30%というのが気にかかります。現場での感覚ですが、かなりの割合で読み書き障害、LDの子が多いと思っています。このあたりも調査をしていきたいと思っています。

■齋藤佐和先生
目白大学／ろう児の言語発達研究の立場から

生活言語獲得については、今やゼロ歳代に発見される時代となったので、どういう道に進むにしてもかなりの時間を充てられるようになりました。だからこそできるだけ子どもの個性にあった日本語習得の方法を探すこと、子どもにとってはより楽な指導をしっかりとやってあげる必要があります。

本来の意味で言語が「ものを言う」(力を発揮する)ことについては、生活言語習得の段階では

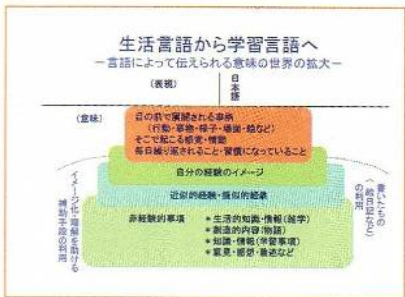


図4

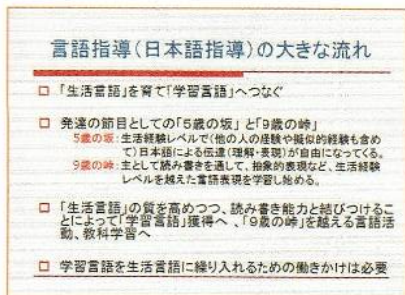


図5

気づきません。生活言語がレベルアップする段階では、言葉でいろいろなことがわかるようになるから言葉の意味がわからないことに気づくし、こ

とばを構成する音にも意識が向いてきます。そのレベルに引き上げていくためにどういうやりかたをするか。介入プログラムだけではありません。それが有効な場合もありますが、子どもがよくわかっていく状況の中で日本語を使いこなす経験を多くしてあげて欲しいです。その経験を積むと、しだいに分からないことを言語でわかる段階にいく方略が身につきます。最終的には読み書き能力があつてはじめて、一般に通用する情報を言葉で取り込むようになります。それには長い年月が必要で、小学生から大学生までずつとかかることです。段階にあわせた着実な日常的働きかけと、個別の能力にあわせた指導プランの2本立てが必要なのではないでしょうか(図4・5)。

個別プランをたてて、教科書とは違う生活の言葉のレベルをあげることも大切にしてほしい。言葉というのは、何について語っているかが重要です。最初は目の前にあることや経験ではつきりわかっているイメージがあること。次は自分の経験ではない

が、人の話からイメージできること、やがて知識にかかわることへと拡がっていきます。これが小学校低学年ころまでに起こってきます。

その移行で苦労するので、9歳レベルの時と言われてきました。幼児期後半からの話し言葉の発達の節目(5歳の坂)に読み書きが加わり、暫くは一緒につづき、やがては読み書きが新しい言葉を感じるための主流になっていく。そこに本格的に入るのが9歳の峠。我々はその大きな流れを意識する必要があります。理想的に言えば生活言語をしっかりと育てて、かためて、読み書きに結びつけていくと、学習言語獲得は円滑になるし、教科学習もきちんと進められると思います。

ただ、語彙は続けて勉強していくべきもので、一生涯続けるものと考えられるので、学習言語を覚えた後も生活で使えるように働きかけることは大切で、聴覚障害児の周りにいるものにとつて継続していききたいことです。子どもたちが読み書きを通じて自分で言葉を増やす時が来たら、彼ら自身での獲得に任せていききたいと思っています。

■森 壮也 先生
JETROアジア研究所／当事者の立場から

今まで聴者の方のコメントでしたが、今回のシンポジストの中では私が唯一のろう者です。手話を日常的に使用しています。手話については、日本のみならず、フィリピン、アメリカ、アフリカのケニヤ等の手話に対しても音韻論、形態論、統語論などの研究をしています。

ALADJINは、残念ながら真の意味での言語評価とはなっていません。音声言語の評価に限

おたより

写真＝米内山 功

森社也先生



定されたものであること
を、はっきり
明確に記述す
る必要がある
と思います。

ろうの子ど
もはバイモー
ダル・コミュニ
ケーションシ
ョ

ン、手話も音声言語も混在している言語状況にあり
ます。それが一般的ですが、音声言語側面だけ
をとらえているだけに過ぎず、子どもが本当に持
っている言語力の測定評価とは言えません。子ど
もの言語力をきちんとはかるためには、手話の力
を無視してはできません。手話評価に困難があつ
たとしてもです。つまり、これを言語力の評価と
してしまうことは、子供の能力を不当に評価する
方法が一人歩きしてしまう危険性があるというこ
となのです。

次にALADJINを用いた研究成果につい
て。スクリーニングの次には早期療育を始めるこ
とが重要だとしています。ところが、この早期療
育も音声言語に限定されています。医師、ろう学
校が親御さんにきちんと手話に関する情報提供で
きるかという点、ほとんどできていません。結果、
子供の能力が不当に評価される危険性が残りま
す。親がろう者である場合、ろう児は子供時代か
ら、手話が十分周りにある環境で育ちます。聴者
の親が90%、ろう者の親をもつ者が10%と少数で
すが、それだからといって、考慮しないでいいこ
とにはなりません。ですから言語の早期療育もA

LADJINのままでは、結局は、音声言語に偏
っていき誘導がされてしまう危険性があるので
す。また、子どもには視覚的言語の力がありますが、
今回の評価では視覚的方法は補助的手段としての
みの評価です。子どもの親の90%が聞こえること
から親御さんたちは、視覚的手段方法についてよ
く知りません。したがって親は自分と同様にしや
べれるようになってほしい気持ちから、自分の子
どもの教育を進める。それでよいのかということ
なのです。

福島邦博先生からオートノミーの話がありまし
た。当事者の意見を尊重するということでした。
しかし、そのためには、きちんとした情報提供が
無ければ、当事者判断はできるものではありません。
ん。

調査対象として、0〜12歳程度、また、カッコ
で4〜12歳となっていますが、その後はどうなっ
ているのでしょうか。簡単に、語彙、単語だけで
はコミュニケーションできない状況が実際にやっ
てくるのは思春期になってからです。そこで行き
詰まりを感じる聴覚障害者をたくさん見てきまし
た。それなのに、その世代を調査研究に含めなく
て、よいのでしょうか。聴者の場合は音声日本語
のみで問題はないですが、ろう児の場合は、音声
言語と手話、どちらかだけを選ぶのではなく、両
者の言語を持って成長していきます。にもかかわ
らず、音声日本語のみの調査をしていることに疑
問を感じます。子どもたちは手話と音声言語の2
つの言語環境をリンクさせながら、両者を成長さ
せていきます。片方に偏りをもった調査だと、今
後の見通しを誤っていくのではないのでしょうか。
言語には、手話もあります。日本語もあります。

それがまるで日本語だけであるかのような誘導が
あることを残念に思います。

アセスメント、子どもの言語評価については倫
理性が非常に問われます。大学の倫理審査委員会
を通っているということですが、これは方法につ
いての倫理が認められただけです。成人の聴覚障
害者、ろう者からは違った意見が聞かれるので
ないかと思えます。その視点が欠けていると思
います。

ろうの子どもに大切なのはなにか。くり返しに
なりますが、言語力です。日本語があり、手話が
ある。この両者がある。そして、その両者を併せ
た言語力の測定が重要です。日本語の評価だけに
偏らないことが重要です。



パソコンノートテイク勉強会・夏のお楽しみ会

7月21日（土）に、「やってみようパソコンノートテイク」と題してパソコンノートテイクの勉強会を行いました。短時間だったため、ざっと必要なことだけを流した感じでしたが、連携して入力することを体験できたのでよかったです。練習してぜひ練習会や都の講習会などに参加して、通訳を目指してほしいと思います。

（勝野美佳子）



同日、夏のお楽しみ会も開かれました。



トライアングルの会員のみなさんの近況報告！

訃報

トライアングルの「おたより」に深く関わって下さった2名の方が、この夏から秋にかけて鬼籍に入られました。今までのトライアングルへのご協力に深く感謝し、ご家族の皆様方には衷心よりお悔やみ申しあげます。

■平山 啓子さん（7月27日御逝去／享年63才）

平山さんはトライアングルの「おたより」の編集長として、「聴覚障害児と共に歩む会・トライアングル」の初期からご活躍いただきました。

平山さんは、編集長として聞こえない子供を持つ親自身か責任を持って「おたより」を作り上げるという、強い気持ちを持っておられたように思います。おたより入稿時のせわしない雰囲気の中、ときばきと原稿の割り付けの指示を出されていた平山さんの姿が目には浮かびます。

また、平山さんは杉並区の要約筆記の会「さくらんぼ」の立ち上げから参加され、娘の悠子さんをはじめ多くの聴覚障害者の情報保障に力を尽くして来られました。自らノートテイクの活動をされるかわら、後輩への教育や啓発活動に走りまわっておられました。なお、悠子さんは国会のなかにあるJTB（日本交通公社）で活躍されています。

大きなご病気で「おたより」が続けられなくなった後にも、「なにかお手伝いすることがありましたら」と声をかけて下さ

っていました。そのお葉書をいただいてすぐの悲しいお知らせでした。

平山さん、今まで本当にありがとうございました。

■内田昭三郎さん（10月20日御逝去／享年84才）

内田さん（平和堂印刷所 社長）は、30年以上にわたり「おたより」の印刷を引き受けて下さいました。その他の出版物についても平和堂さんに大変お世話になりました。昔の便り担当者に聞くと、内田さんは大変きさくで親切な方だったそうです。入稿の時間に間に合わず、夜遅くトライアングルの事務局に取りに来ていただいたり、印刷した原稿をご自身で校正して下さいましたこともあったそうです。

内田さんがお元気でいらっしゃった頃は、トライアングルの研究会で販売する書籍を会場まで、何回も運んで下さったそうです。今回の訃報は、聴覚障害を持たれた内田さんのご子息からお知らせいただきました。内田さんは、印刷の仕事を引き受けて下さっただけでなく、トライアングルが行う教育活動や情報発信の活動を心から支えて下さった一人だったように思います。

内田さん、本当にお世話になりました。有り難うございました。

（児玉眞美）

プロのアスリートとして

はじめまして。宮崎在住の横手奈都紀と言います。11年前までは両親のいる千葉に住んでいましたが、約13年前に宮崎へ遊びに行った時に、大阪出身のK先輩の美しい波乗りの技に魅かれて、インスピレーションだけで単身勝手に宮崎に引っ越したどんでもない親不孝の娘です（笑）。

あれから11年。5年前にJPBA（日本プロフェショナルボディボーディング連盟）の公認プロに合格し、活動の一環として、ボディボードの楽しさを同じデフ（聴覚障がい者）の子どもたちに教える為に毎年夏にマリンスクールを開催したり、所属しているサーフショップのライダーとしてスクールをしています。

マリンスクールを開催したきっかけは、ろう学校にいた時、プロのアスリートと出会う機会が全然なかったので、こういったスクールを続けることで子どもたちの将来が輝き続けるものでありたいと思ったからです。毎年子どもたちの笑顔を見ると、身体が続く限りずっと続けていきたいと思っています。

現在、私は36才ですが、年をとれば取るほど、プロのアスリートとして進化し続けていくような感じがします。例えば、若い人と同じような波乗りやトレーニングは絶対に出来ませんが、経験値は絶対に上なので、自分が目指している目標をきちんと立てれば、出勤前の朝イチしか波乗りが出来なくても、何処をどうすればいいか？どうトレーニングして波乗りに挑めばいいかを自分でちゃんと理解出来ているので、調子が悪くても納得がいくようになりました。

目標ですが、大きいものではなく、なるべく週ごとに出来る具体的な目標を立てています。そうすることで、大きい目標に辿りつくという感じです。

今年の冬、今年の目標の一つであるハワイのパイプラインに挑戦しました。行って本当に良かったと思います。想像以

上に波は凄く、挑戦する人たちは技術面だけでなく精神面においても強くなると感じていました。それは、そこにいたものしか分かりません。来年も冬に挑戦して、メリハリのある1年にしたいと思っています。

本当に色々なプロがいるので、私はまだまだですが、プロの名前に恥じないようにやっていこうと思います。こんな私ですが、宮崎の「surf3」というショップでライダーをしていますので、スクールを受けたい方は、いつでもご連絡下さい。

現在、日本のボディボードはまだメジャーではありませんので、プロだけで生活できない状態です。ですので、宮崎のソーラーフロンティア(株)という会社で働いています。両立してでもプロ生活は出来るんだ！ということを見せたいです。

最後まで読んで頂き、有難うございました。（横手奈都紀）



<http://ameblo.jp/natsuki-1173/>
それいけ！デフプロボディボーダー横手奈都紀

原稿募集中！

「おたより」では、全国の様々な地域にお住まいの会員の皆様のニュースや手記などを募集しております。次回の締切は2月末です。詳細は事務局にお問い合わせ下さい。

大学生活は楽しい

こんにちは！ 筑波技術大学産業情報学科の宮寺智成です。来年は、3年生なので、先日大学からインターシップ先を探すように指導されましたが、どんな仕事に就きたいかも、いまだ目わかりません。そんな僕ですが、学生寮の一人暮らし、大学内のジムでの筋トレや、週二回筑波大学のプールに通ったりと、結構楽しくやっています。旅行が好きで、出来るだけ学生時代にいろんな所に行きたいと思っています。（宮寺智成）

女優、サインボーカル、ダンサー 果敢に舞台に挑む聞こえない個性

「ハンディを持つことは障害なのだろうか」、本当は他の能力を増す特別なスイッチではないだろうか。そんな疑問を解決すべく、オレが今、最も注目する「障害革命家」、すなわち障害を前向きにとらえ活動する人々を紹介する。

大橋弘枝さんにお目に掛かり、オレの常の思い「ハンディこそ誇るべき個性」は、確信となった。

彼女を羽ばたかせたのは、ろうの少女が主人公のアメリカの戯曲の舞台である。彼女はここで聞こ

えないと云う個性を思いっきり生かしたのだ。そしてそのアメリカを訪れ、彼の国の唯一と云っていい長所「オープンマインド」に触れた彼女は、それまでの鬱積した思いを解放させたのだ。つまり、アメリカが大橋弘枝を心底羽ばたかせたとも言える。

人気者、引っ張りだこの大橋さんに無理を言っ
て、東京大学(駒場)先端研にお越しいただいた。
この「おたより」の発行元トライアングル事務局
は3号館4階にある。待ち合わせの校門まで出迎
えに行こうとしたそのとき、大橋弘枝さんはお一
人で直接事務局のドアを叩かれ、「こんにちは！」
と登場されたのだ。

正に、華やいだ！ 一陣の光の風が吹き、事務
局はその光に満たされ、待ち受けたみんなは晴れ
やかな笑顔になった。

日本語を完璧に習得した素敵なアメリカ人、大
橋弘枝さんの第一印象である。

大橋さんははれつきとした日本人だ。それは判っ
ている。彼女の著書『もう声なんかいらな
いと思
った』も読ませて頂いたし、どう見ても可愛くて
明るい、日本のお嬢さんである。でもアメリカ人。
彼女の生まれる前から有に100回はアメリカ



大橋ひろえさん/1971年生まれ。幼少の頃、トライアングルの前身、母と子の教室に通う。聴力は子供の頃は80dB、現在は100dB。高校を卒業後、手話演劇やDANCE、自主映画製作を始める。1997年に制作したビデオ作品「姉妹」で「SIGHT・サイト映像展」で入選。1999年「小さき神のつくりしら」で主演・サラに一般公募で選ばれ、第七回読売演劇大賞優秀女優賞を受賞。その後、渡米して演劇やDANCEの勉強をするかわら、手話SONG & DANCEのユニット「ソウル・レインボー (Soul Rainbow)」を結成。2002年、初めて制作したミュージックビデオが、アメリカの「メディア・アクセス・アワード賞」で第二位を受賞。2006年、サインアートプロジェクト、アジア初企画サインミュージカル「Call Me Hero!」をスタートし、好評。

おたより

大橋さんHP：<http://www.sapazn.jp/> ブログ：<http://ohashihiroe.blog57.fc2.com/>

に通い、アメリカ人の友達が大量居るオレには、懐かしくも嬉しいインタヴューとなった。

いきなりの主役抜擢

大橋さんがプロの女優としてデビューしたのは、1998年。俳優座劇場プロデュースの舞台「小さき神のつくりし子ら」の主演・サラ役だった。

「アメリカで生まれたこの作品にはルールがあって、主演のろう女性にはろう女優を、難聴者の男女の役には難聴者を使うことが明記されています。しかし、それを無視していたのは日本だけ。聴者の俳優さんを使っていました。それが初めてのろう者を主演にするということで、軽い気持ちでオーディションを受けたら、ヒロインに抜擢。『私でいいの？大丈夫かな？』と驚きました。演じることに対しては素人に近い状態だったんですよ」（大橋さん）。

口話で育った大橋さんが、声を出すことをやめ、手話にこだわり、共演者とは手話通訳を介したコミュニケーションで臨んだ。

「デフパワーが強い時代で口話ができることがわかるとパッシングが来るだろうとそれも怖かった。大橋はろう者ではないと言われなくなかったのです」。

しゃべれることを隠し、手話を貫いた大橋さん。稽古開始から千秋楽を迎えるまでの9カ月間、全く声を出さずに過ごした。

「周囲の人に嘘をついてるわけですから、苦しくて孤独でした。ただ、プロの演技についていくのに必死で孤立しても平気だと変なバリアを張ってたんですよ。演技のアドバイスをもらっても、素

直に聞けず、『聞こえない人の何がわかるのよ、もっと勉強してよ！』と感情的になっている自分がいました」。

それでも舞台は千秋楽を迎え、大橋さんは第7回読売演劇大賞優秀女優賞を受賞した。

「手話って声と一緒になるとどうしても表現が弱くなってしまうから、結果としてはよかったです。ただ、舞台が終わり、本当にこれでよかったのかな、自分らしくないと考え始めました」。

そんなとき、友人の高村真理子さんから「悩んでないで、アメリカでも行ってきたら」と、ろう者のための国際的な演劇ワークショップを紹介され、「行きたい！」とその場で即決した。

「彼女はASLの先生で世界を飛び回るキャリアウーマン。『WE (World Exchange of Silence Culture)』という支援会社を設立し、その経営者もしていました。彼女も同じ聞こえない人。彼女のあきらめないという姿勢には随分影響を受けました。私がやりたいだろうと思うものを彼女が目の前に用意してくれて。目から鱗が落ちるくらい、いろんな経験をさせてもらいました。悲しいこと

に、今から6年前彼女は亡くなりました。かけがいのない人で、大きな支柱を失った感じですよ」。

アメリカで自分が変わる

「英語は？」（油井）

「英語が全くできない状態でアメリカに行ったのですから、無謀もいいところ。怖いもの知らずだったんですね。今の若い人に言いたい、勢いを使って。動けば動くほど世界は変わります」（大橋さん）

「そうだよ。吃驚するほど変わるよね！『その勢いを使え』って、いいね！」（油井）

「日本で色んな人と仕事をする、聞こえないからできないんだらうなというのを素直で感じてるんですよ。腫れ物に触るそんな感じ。その壁がある限りは当り前の仕事ができるのは難しいのかなと思うこともあります」（大橋）

「アメリカは多民族国家のせいもあるって自分の個性、存在を主張する。その分相手の個性も認めるという文化でしょ。その点フェアだよ」（油井）



「もう声なんかいらなかった」
（大橋弘枝 著 / 出窓社）

文・写真＝油井昌由樹、田村美奈



「違いをとりいれることができてから」（大橋）
 「日本もそっちの方向に開放したいじゃない。違いがあるから楽しいし、人生豊かだよ。自分は世界にたった一人で、世界で一番だということに目を向けなきゃダメなのよ。一人一人全員だよ。そのためには自分を尊敬するところからはじめないと。それが一番しにくいことだけ」（油井）
 「アメリカに行って、自分に自信を持ちはじめたのかな。これまでは手話とか口話とか伝え方を気にしてたけど、伝えたい気持ちが強ければ強いほど、バイブレーションのように伝わっていくんですね。私は、英語はそこそこだけど、ボディランゲージをやる通じるんですよ。コミュニケーションの方法って一つじゃない。色んなパターンがあることをみいな学ぶべきじゃないかと思います」（大橋）

2001年、「小さき神のつくりし子ら」の再演のために大橋さんは日本に戻った。そしてはじめて共演者の前で自分の声で話した。
 「いきなりシーンとなっちゃった。みんな椅子か

ら落ちそうになってました（笑）。「大橋ってこんなにうるさかったの！」「そうです。やっと自分らしい芝居ができるようになりました」（大橋）

なぜ、決めつけるの？

「音楽に合わせて踊れることに、みんな驚くですよ。聞こえないのに何で？」（油井）

「逆に驚くのは、何でそう決めつけるのか？ アメリカでは聞こえない黒人はジャンベ（西アフリカの大鼓）を叩きながら、みんな踊ってますよ」（大橋）

「小さいときから音楽好きだったの？」（油井）

「小さいときは音楽って何？みたいな感じでした。それが小学校6年生の頃、TV『ベストヒットUSA』でミュージックビデオを見て音楽にはまりました。感情表現が豊かだから視覚だけでも楽しいじゃないですか。エネルギーでパワフルな歌はすごく伝わるんです。ティナ・ターナーやステイヴイー・ワンダー、ああいう感じはものすごく伝わるんです。ピリー・ホリデーの『奇妙な果実』を聞いていると、これって音楽って思うくらい、神経が詰まったような、重いんですよ」（大橋）

「それはどこでわかるの？ 聞こえるの？ 感じるの？」（油井）

「初めて聞いたときは、黒人の人が手話で歌ってくれたんです。手話の上にリズムが乗ってるからすごいんですよ。その後、You Tubeで本人が歌うのを見て、こんな歌い方するんだと驚きました」（大橋）

「確かに。ピリー・ホリデーは別格です」（油井）

芸能の世界に挑戦してほしい

「聞こえない人に、芸能の世界にもっと入ってほしい。増えてほしいです。なぜ増えていかなかった原因がわかりません」（大橋）

「できないと思う人が多いのかな？」（油井）

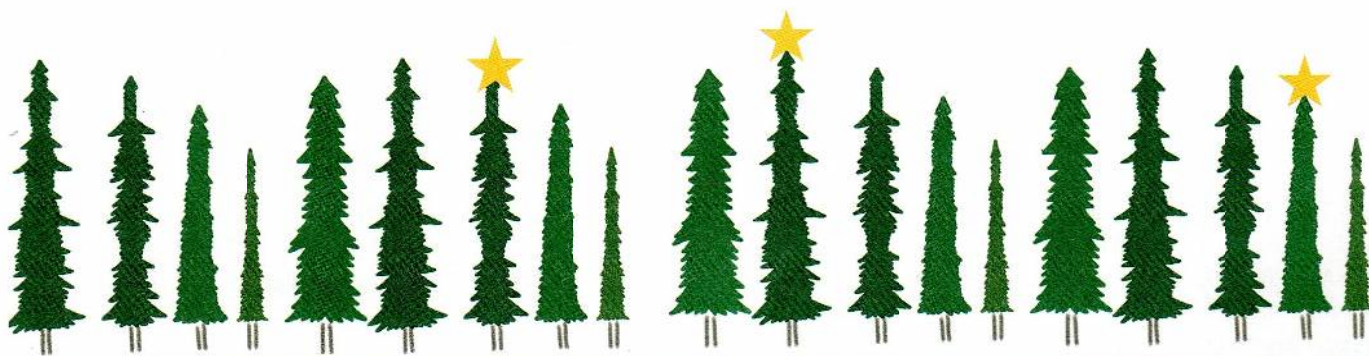
「それを考えたら何もできない気がする。だから、女優になるとか、舞台に出るといったムードがわからないのが原因かな、とも思ったりするんですけどね。40代になったら、気持ちに余裕ができてきたのか、人に教える心の準備ができてきたと思ってるんです。役者とか舞台に興味がある聞こえない人がいたら、色んな交流を作ろうかな。今まで経験したこと、芸能の世界のことをみんなと話しながら関わって行くのも楽しいかなと思います」（大橋）

「素晴らしいね。日本のバリアフリーはアメリカに比べ50年も遅れているというじゃない。外国のいい制度やシステムを日本流に構築して、障害者に理解のある当たり前前の社会に変えていきたいよね」（油井）

「バリアフリーの世界は、まだまだやらなきゃならないこと、課題がたくさんあります」（大橋）
 「日本はこれから開発していくフィールドがいっぱいあるから、これからは楽しみだね」（油井）



大橋さんが出演するミュージカル「女子高生チヨ」2012年12月1日～9日（東京グローブ座）主演は木の実ナナさん



トライアングル クリスマス会

2012.12.15sat

時間：午前10時30分～午後3時30分
会場：東京大学先端科学技術研究センター3号館（東京都目黒区駒場4-6-1）

●トライアングル卒室生によるトークセッション

「小学生・中学生に 伝えたいこと」

- 勝野崇介さん（立教大学）
- 菅原有紀さん（NEC勤務）

●大学生によるパネルシアター

●スペシャルゲスト 大道芸「トム」

- クイズ・ゲーム
- 手話の歌

◆交通：小田急線・東北沢駅から徒歩7分
井の頭線・駒場東大前駅から徒歩10分
千代田線・代々木上原駅から徒歩12分

◆会費：大人（中学生以上）1,000円
子ども（3歳以上）500円※
※プレゼント代

◆手話通訳、要約筆記がつきます。

◆昼食は用意します。
持ち寄り大歓迎です。

◆参加希望の方は、
下記申込書をコピーして、
必要事項を記入の上、FAXをお送り下さい。
FAX：03-5452-5322

◆申込締切：**12月10日**まで

参加申込書

代表者	同伴者 御芳名
御芳名 (よみ：)	(よみ：)
御住所	(年齢： 才 / 小学 年生 / 男・女)
	(よみ：)
御連絡先	(年齢： 才 / 小学 年生 / 男・女)
	(よみ：)

定価：250円（1部）



トライアングル金山記念聴覚障害児教育財団

【連絡先】

〒153-8904

東京都目黒区駒場4-6-1

東京大学先端科学技術研究センター 3号館

バリアフリー分野 福島研究室内

TEL&FAX：03-5452-5322

E-mail：aq2t-ueym@asahi-net.or.jp

HP：http://www.asahi-net.or.jp/~aq2t-ueym/

●交通

小田急線「東北沢」駅より徒歩7分

井の頭線「池ノ上」もしくは「駒場東大前」駅より徒歩10分

千代田線「代々木上原」駅より徒歩12分

●地図（下記参照）

Area Map



Campus Map



もくじ No.239

- 異文化体験の宝物（室園晶子さん） 02
- 聴覚障害児の日本語言語発達のために 08
- 会員のみなさんの近況報告！ 14
- 油井昌由樹の障害革命家を訪ねて 16
第8回 大橋ひろえさん
- クリスマス会のお知らせ 19

表紙の絵について

「柿の木パーティー」

今回は、柿の木に群がるムクドリ達を描きました。美味しそうに柿がオレンジ色に染まったある日。一年間この時を待ってました！と言わんばかりに、ムクドリ達は一斉に柿の木に集まります。そして、突然柿の木パーティーが始まるのです。ムクドリは水色の声をあげて、全身で嬉しさを表現しているようです。オレンジ色の柿と水色の鳴き声が混じり合い、冬の景色を彩ります。

（清須史門）

さがしてみよう！

表紙の絵の中には「音色（ねいろ）」という文字が隠れています。さー、どこにあるでしょうか？ 探してみよう！

制作

編集：トライアングル広報部
油井昌由樹、田村美奈、十島典弘

表紙題字・絵：清須史門

デザイン：田村美奈

印刷・製本：株式会社 北斗社